

2013年5月15日
第206号

題字 住谷悦治



燎 原 社
(京都の民主運動史を語る会)
代表 岩井忠熊
事 務 局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅 33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823



【連 載】

この
1枚
全立命館1万人集会
1969年1月20日

「封鎖解除・学寮委員解放・正常な話し合いを実現する全立命館1万人集会」は立命館大学が主催、五者共闘会議参加の形態で開かれた。広小路キャンパスはぎつしり学生・教職員で埋まり、大学を代表して末川博総長がマイクを握り「2万余の学生諸君の内、数百名の寮生諸君との話し合いが、封鎖された会場でなさねばならない理由はどこにもない。直ちに封鎖を解いてもらいたい」と訴えた。大学本部のある中川会館が「寮連合」により暴力的に占拠されたのは1月16日、会館内の金庫には入試問題も保管されていたという。しかし大学側の動揺もあって封鎖解除は進まず、むしろ恒心館、研心館などに拡大、結局5月20日、機動隊によって排除された。今年2月28日に亡くなった小原輝三さんの写真である。このほど出版された『立命館大学紛争の五カ月』（文理閣）の裏表紙に載せられている。本と小原さんのことは本号に黒川美富子さんが書いている。

京都子どもを守る会の60年 3月例会 関谷美奈子さんの報告

西口克己の文学とたたかひの継承を地域から一生誕100周年に思う

連載「京都民報」私史(4) 株式会社化と松村社長のこと

(悼)『立命館 大学紛争の五カ月 1969』と写真家一小原輝三さん

(悼) 栗田栄さんと「悪魔の飽食」合唱運動

わたしの平和運動史—京都での33年を振り返る

(悼) 共産党府委初代書記長の大原進さんを偲ぶ

BOOK 「新日本婦人の会京都 50年のあゆみ」

研究ノート 朝鮮戦争前後の京都の学生運動

2
辻 保夫 4
湯浅 俊彦 6
黒川美富子 8
馬原 郁 10
栗田栄さんの講演から 11
藤井 舒之 12
井上 吉郎 13
今西 一 14

会員消息・お便りから
2013年度総会と
懇親会のお知らせ
催し案内／編集後記
16 16 15

京都子どもを守る会の60年

京都子どもを守る会前事務局長 関谷美奈子さんの報告



3月例会は3月29日午後、東山いきいき市民活動センターでひらかれ、児童憲章25周年を記念して刊行された文献に収録された関谷さんの論文「子どもを守る運動―私の25年」の冊子と、それ以降については、スライドを用いての「京都子どもを守る会60年」の報告をお聞きしました。

人形劇サークルからの出発

人形劇団京芸ややまびこ座など、戦後京都の文化運動が広がるなか、私たちが住んでいた川東（左京区）の地域で、近所の青年と一緒に人形劇のサークルを作りました。サークルの名前は「赤トンボ」、近所の子どもたちを集め、「和尚さんと小坊主」「赤ずきんちゃん」などの人形劇を、近くのお風呂屋さんを借りて上演していました。生活が苦しいのに、人形劇どころではないと思われるかも知れませんが、人間が生きていることの面白さともいうのでしょうか、生活が苦しかったからこそ、生きがいみたいな気持ちでサークル活動をやれたのかもしれない。

そのうち、人形劇を見に来ていた子どもたちから「人形劇も自分たちでやりたいし、宿題も教えてほしいから、子ども会を作ろう」という声が

上がり始めます。

青いとり子ども会のこと

私たちは二階住まい、生活保護を受けてお孫さん2人と生活されていたおばあさんが一階で、週2回夜だけ、おばあさんの部屋を貸して頂き子ども会をスタートさせました。子ども会の会費から部屋代を捻出することで「青いとり子ども会」が始まります。

最初は、子ども会の指導は夫がしていたのですが、教員組合の活動に専念することとなり子ども会に関われなくなつて、我が子を抱っこしながら、私が子ども会チューター（指導員）1年生となりました。翌年、おばあさんが亡くなられ、そしてお孫さんも親戚に引き取られた後、家

主さんの好意で一軒家を貸してもらえることになり、子どもたちは描いた自画像を壁に貼ったり、幻灯の会などもすることができました。催しものには、50名の子どもたちが6畳の部屋と庭まであふれるばかりの大賑わいでした。

1口50円のカンパ活動もして地域に診療所ができました。私たちが建った診療所、病気の時だけではなく困ったことは何でも相談に行ける診療所で、診療所の事務長さんのお世話で、学生のチューターさんや子ども会に来てくれるようになりました。勉強会の他にも、子ども会に来ていない子どもたちにも呼び掛け、仲よし運動会もやりましたし、夏休みのお化け大会や合宿、秋の芋ほり、12月のクリスマス学芸会などは年中行事となりました。

初めからうまくいったわけではないけれど、父母の会での喧々諤々の議論で親御さんとの気心が通じたことも、子ども会の運動を支える大き

各地の子ども会活動を結集

執筆者紹介

辻 保夫（つじ・やすお） 前大阪教職員組合委員長。伏見区在住。

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ） 本会世話人。元「京都市民報」編集長。大山崎町在住。

黒川美富子（くろかわ・みふこ） 図書出版・文理閣代表。下京区在住。

馬原 郁（まはら・いく） 本会世話人。左京区在住。

藤井舒之（ふじい・のぶゆき） 元長岡京市会議員。西京区在住。

井上吉郎（いのうえ・きちろう） WEBマガジン「福祉広場」編集長。北区在住。

今西 一（いまにし・はじめ） 小樽商科大学特任教授。伏見区在住。

な力となりました。

チューター会の学生たち

子どもたちが帰った後のチューター会は、他愛のない日常の話から日頃の悩み、原水爆禁止、教育委員会任命制まで多岐にわたる話で盛り上がりしました。「この子ども会の中から自分の生き方を学んだ」、OB会も組織した高野哲夫さん。カリエスで下半身不随になりながら、車いすで全国を飛び回り企業や政治に対して大論陣をはらっていた方です。で、ご存じの方も多いと思います。

高野さんだけではなく、大学を卒業した学生さんたちは全国各地で頑

張っています。ベトナム戦争の時にベトナムの人々の被害状況を調査した益田明典さん（当時秩父診療所医師）もチューターのひとりでした。当時は左京だけでも、北白川や田中の地域で子ども会活動が活発に行われていましたし、そこでも学生さんたちの力は大きかったと思います。

京都子どもを守る会の結成

1952年、ウィーンで開催された子どもを守る世界会議の呼びかけで、5月に「日本子どもを守る会」が、9月13日には「京都子どもを守る会」が結成されます。京都が呼びかけに呼応できたのは、いろんな分野で子どもを守る運動が行われていたからでした。

京都教職員組合をはじめとして、婦人民主クラブ、学生の児童文化研究会、民主的な子ども会、そして、学者・文化人の方々の力に負うところもあったと思います。京都教職員組合の教育研究集会には「父母と教師が手を結ぶために」という分科会もあり、御室民主会議の報告や青いとり子ども会の活動なども取り上げられました。こんなきっかけで日教組の教育研究集会にも参加するようになりました。

生涯忘れることができない旭丘中学校事件、闘いと名のつく活動の第一歩となった勤評闘争、安保闘争と高校全入の運動、蜷川さんの「15の



平和行進に参加する青いとり子ども会。
中央が関谷美奈子さん（1960年）

春は泣かせない」決意表明には大きな励ましを受けました。学力テスト反対運動、小児マヒ生ワクチンや給食脱脂ミルク反対運動、そんな数々の子どもを守る京都の運動が、64年の第11回子どもを守る文化会議の京都開催につながりました。

子どもを守る連絡会へ

京都教職員組合書記局に一つ机を借りて、文化会議のための実行委員会の事務局が生まれました。3千名が参加した文化会議は、京都にとっても実り多い集会で「子どもは母親任せ、先生任せ、まして子ども任せでは守れない。働く人たちが中心に

なり、あらゆる階層の人たちの知恵と力を集めることが、子どもを守る運動を大きく発展させるものだ」という運動の道筋を明らかにしてくれました。集会の後が大切、実行委員会を解散しないで、今後実行委員会の参加団体がともに運動を行っていくことを申し合わせ、「京都子どもを守る連絡会」が結成されました。7万人の観客動員を成功させた「象の花子」上映運動は「親と子の劇場」を生み出しました。

蜷川府政の果たした役割

子どもを守る会の運動にとって蜷川さんの果たされた役割は大きかつ

たと思います。70年の知事選挙は忘れることができません。蜷川さんの対立候補は「京都の子どもはバカだ」とこれまでの京都の全人教育を非難、京都の教育を守り育ててきた私たちも黙っているわけにはいかず、これまで選挙活動などやったこともない人たちも参加しての選挙運動で民主府政を守り抜きました。

こんな闘いもあって、蜷川さんとは近しい関係にあり、大きなバックアップを頂いたと思います。国際児童年の年、鴨川の河川敷で7万人が参加した企画の成功なども蜷川さんに負うところが大きかったと思います。

報告を受け、京都の子どもを守る会の運動は全国的にも稀有、なぜ京都では、今日まで子どもを守る会の運動が継続しているのか。母親運動との関係は。京都の戦後運動をリードした女性の果たした役割と人となり、といった内容での意見交換がおこなわれました。

60年の記念誌はもうすぐ刊行される予定、これまでのニュースなどを収録した資料集的な記念誌を準備されているそうです。なお、スライドを中心にした70年代の報告は割愛させて頂きました。

（文責 井手幸喜）

西口克己の文学と たたかひの継承を地域から

— 生誕100年に思う —

辻 保雄（前大阪教職員組合委員長）

井ノ口・西口インタビューを
読んで地域の人々と語り合う

2011年春に退職した後、自分の終の住処、終の活動の場となる中書島を含む伏見南浜地域の歴史や文化、今後の町づくり、住民運動などについてあれこれ思いをめぐらせているときに、本会世話人である佐藤和夫氏から紹介され、「療原」誌を手にする機会をえた。

佐藤氏が井ノ口誠二さんと西口のぞみさんへの聞きとりをまとめた「私の一期一会」シリーズ（201号から204号）を読みますすむうちに、「いま自分が求めているものの一つがまちがいなくここにある」との感を強くした。そこには、中書島の廓の歴史を背負った小説家であり革命家であった西口克己の生々しい人間像とともに、西口氏の薫陶を受け、ともに中書島・南浜地域の戦後史をぬりかえる事業に尽くされた井ノ口氏の稀有な自己変革の足跡が記

されていた。また、遊郭を学生下宿に転換させ、商店や中小業者の営業を守るという前代未聞のたたかひをはじめ、伏見区画整理反対のたたかひ、高層マンション建設に反対して伏見の町並み景観を守るたたかひなど、全国に誇れる伏見南浜地域のたたかひの証言があった。

いま中書島地域を活動の足場にしつつある私は、西口氏や井ノ口氏が「世間からいけばん軽蔑されている地域を、いちばん民主的な地域につくりかえたい」（西口克己『廓』始末記より）との思いで駆けずり回った旧遊郭の道を徒歩や自転車で行き来し、両氏とゆかりの深かった商店主や地域の人々とも言葉を交わす毎日である。今回のインタビュー記事は、西口氏や井ノ口氏の踏み跡が今も残る地域に生きる者として、自分の非力さはさておき、その進歩と革命の伝統をどう継承し、今日に生かすべきかと、新たな意欲をかき立てられるものであった。

西口克己生誕100周年記念し
文学散歩と「語る集い」

これと前後して、西口克己氏の生誕100周年記念事業を催したいとの話が佐藤氏からあり、「そうぞう館」（伏見地域文化の発信基地）の黒崎夏彦氏とともに、事務局をお受けすることになった。西口氏の誕生日である4月6日が記念事業の日とされ、午前は中書島地域を中心とする「文学散歩」、午後は「西口文学を語る集い」が行われた。

自伝的小説「廓」の舞台となった中書島地域での文学散歩は、旧西口邸（小説では「貫銀楼」）をはじめ、まだわずかではあるが旧遊郭の名残をとどめる家並みをめぐり、西口家ともゆかりの深かった長建寺の前住職や、西口夫妻やご子息の光氏（現



「語る集い」であいさつする西口のぞみ夫人

日本共産党常任幹部会委員）をよく知るご近所の酒店主から、貴重な思ひ出話を聞かせてもらうなど、文字どおり、西口克己の作品世界を追体験するものとなった。

「西口文学を語る集い」では、松尾隆司氏（元桃山養護学校教員）の「西口克己と、彼の『文学』から学ぶこと」と題する特別講演をメインにして、演劇、文学、政治をはじめとする各分野の方々から西口文学の真髄や今日的価値、西口氏の生き方などについて、さまざまな発言がなされた。のぞみ夫人からも故人の秘話が語られ、最後に、「京都文学館設立を求める会」および「西口克己文学碑を建てる会」から今後のとりくみへの賛同と協力が呼びかけられた。

伏見の歴史を抜きにして
町づくり・住民運動は語れない

佐藤和夫氏は、南浜地域でのマンション建設に反対する「伏見町並み権訴訟」運動を総括する座談会で、伏見における代表的な住民運動の歴史をふりかえり、第一期が50年代から60年代の中書島遊郭を学生下宿に変える運動、第二期が60年代の区画整理反対運動（西口克己『Q都物語』所収）、第三期が80年代初めの今度の運動である、と語っている（「伏見わが町——伏見・町並み権訴訟・住民運動の記録」）。

ちなみに、「伏見町並み権訴訟」の

運動は、特定の重要伝統建造物の関連地区だけを点として保存するのではなく、それを含んで住民が住み続けられる町並み全体を守る「町並み保存権」、秀吉の築城から三十石舟の舟運、酒づくりへとつながる歴史的景観を守る「歴史的景観権」という、新しい権利を主張する画期的なものであった。

これら戦後の伏見における代表的な住民運動をふりかえれば、日本の社会発展史とも深くかわる伏見の歴史と、その渦中であつて、自らの手で「町づくり」をすすめてきた町衆・住民の地域への愛着とそれゆえの抵抗精神が、不離一体のものとして息づいていることがわかる。別の言い方をすれば、伏見の歴史をぬぎにしては、伏見の町づくりや住民運動は語れないということでもある。ここに、伏見南浜での今後の町づくりのあり方を考える際の重要な視点があり、西口克己の文学とたたかいたを継承する意義の一つがあるといえよう。

伏見の多様な「町づくり」と 西口文学碑建設運動の再興

佐藤氏の区分に従えば第四期にあたる、伏見・南浜の町づくりにどうとらえむか。西口克己の文学とたたかいたの継承はそれにつながる魅力的なテーマである。また、西口克己生誕100周年記念事業を機に、「西口克己文学碑を建てる会」運動の再興

が図られようとしており、伏見・南浜の町づくりの一環として実現させることがめざされている。

私は、今回の100周年記念事業に先立って、中書島地域に住み、商いを営む何人かの方に、西口氏や遊郭時代の思い出などを聞かせてもらった。さすがに西口氏と同世代の方はおられず、多くはその息子さん、娘さんたちだった。

「子どもの頃、着物のおねえさんがタバコを吸いながら日向ぼっこしてはったのをよう憶えています。西口さんは特別の秀才で、学校も飛び級。東大まで行かしたのを近所で知らん者はいません。お宅が共産党の事務所になつてからも、立派な人が出入りする所やと聞いていました。奥さんもすらっとした美人で、息子の光さんのことを『ピッピちゃん、ピッピちゃん』というて、呼んでいましたよ。この辺の歴史は残したい。西口さんの文学碑はぜひほしい」(旧西口邸近くの酒店主)。

「80年前から店をやっているので、小説『廓』にうちの店が出ていないか、一生懸命読んだ。文学碑をつくるなら協力させてもらう」(割烹料理店主)。

「自分の父親は西口さんの暮の相手やった。うちの店を選挙事務所に使ってもらったこともある。この辺り



ご近所の酒店主に思い出話を聞く

のことで、できることは協力したい」(理髪店主)。

「西口さんの家が四軒分あつて、『買ってほしい』といわれたんで、うちが西側の二軒を買ったんです。いまはすっかり面影がないですけど」(電気店主)。

また、余談ながら、「西口光さんが桃山中学の生徒会長時代に、蜷川知事の『15の春は泣かせない』という言葉を引き、『高校全入へ、いっしょに立ち上がろう』と朝礼で大演説され、先生たちも苦笑いされていたのをよく憶えています」と語る女性もあつた。

こんなふうに、明るく思い出をふ

りかえてくれる人たちがいる一方で、「いまさら昔の遊郭のことなんか、ほじくりかえして何になるの」という拒否感が、地域の一部にあるのもまた事実である。

しかし、その一方で、「地域のお宝を探索し、保存・公開する『伏見まるごと博物館』という市民グループの活動に参加する老舗の若い商店主は「西口さんには興味がある。廓は地域にとって『負の歴史』でもあるけど、伏見の歴史として大切にしたい。西口作品の上映会などもぜひやりたい」と語っている。

現在では、ひとくちに「町づくり」といっても、さまざまな立場から、さまざまなスタイルのとりくみがなされている。脈々と引き継がれている地域の祭りや地蔵盆などの行事もまた、「町づくり」を縁の下で支える力となっている。われわれが、こうした新旧の住民による多様な「町づくり」のとりくみにとけこみ、その発展につくすこともきわめて重要である。

こうした伏見の歴史と町衆の営みの灯を受けつぎつ、原発、貧困、憲法改悪などの現代社会がはらむ矛盾に、住民とともに立ち向かうことが求められている。それは、西口克己氏の念願——「世間からいけばん軽蔑されている地域を、いけばん民主的な地域につくりかえたい」——にも通じるものではないだろうか。

「京都民報」私史

4

湯浅俊彦

株式会社化と松村社長のこと

70年知事選の勝利のあと、71年2月の京都市長選でも反動連合を破り、4月の一斉地方選の共産党躍進（府会12、京都市会18議席）と続き、全国的にも大きなうねりをつくり出した。

こうした中で共産党府委員会は、衆議院京都1区に複数の候補者を立ててたかう方針をきめ、72年12月の総選挙で谷口善太郎（現）が1位、梅田勝（新）が3位で揃って当選、京都で歴史的な勝利を収めた。

「編集長、いい写真が撮れています。増ページしませんか」開票の夜、カメラマンのA君が暗室を出て叫んだ。若者たちに握手攻めの梅田氏、みんな喜びいっぱいの表情だ。すぐ決断した。写真を大きく扱い、各界の声を入れて「やったぞ！共産党大躍進」の大見出し頁と、「総選挙、かく戦った 三選挙区本部長座談会」を急遽行つて6頁の特集紙面を作った。徹夜の作業となったが、みんな疲れより達成感の方が強かった。懸命にた

たかった読者からも喜ばれた。

この総選挙で共産党は40議席（革新共同を含む）を獲得、「週刊サンケ



増頁で発行した72年12月17日号

い」が臨時増刊「日本共産党のすべて」を発行、「共産党政権で日本はこうなる！」などと特集したほど衝撃を与えた。京都1区には海外のメディアも注目し取材に駆けつけ共産党勝利のニュースは世界を駆け巡った。

しかし、一方で革新分断の策動が深く進んでいた。社会党府本部（大橋和孝委員長）は73年2月の大会で蜷川府政批判の方針を決め、自民党とともに民主府政転覆の方向に舵をきった。

こうした中で民報は7月から毎号6頁建てとし、蜷川民主府政発展のキャンペーンを繰り広げ、蜷川7選勝利に大きな役割を果たした。

商工会議所・同友会にも加入

京都民報社が株式会社として法人化されたのは1973年11月1日だった。代表取締役社長には松村茂氏がなり、取締役には湯浅俊彦（編集長）のほか、非常勤で細川三西、永良巳十次、監査役に小林義治の各氏が就任した。

松村社長はすぐ京都商工会議所や京都中小企業家同友会に加入、その文化部会や広報委員会に所属し、対外的にも活動の場をひろげていった。松村氏については前にも「燎原」に書いたことがあるがここで改めて紹介しておきたい。

1927年、伏見区に生まれ、16歳で陸軍造兵廠少年軍楽隊員、終戦

後、京阪電鉄に入り運転士となったが50年、レッドパージにより解雇。ちなみに共産党入党の際の推薦者は西口克己氏だった。たかせ保育園（藤谷俊雄園長）職員を経て共産党の専従となり、61年6月から創刊されたばかりの京都民報記者となった。

私が1965年から20年間、松村氏と一緒に仕事をきてきて感心したのはその活動スタイルだった。忙しい中、いろんな文化団体に関わっておられた。63年には京都民主主義文学会を結成、月刊誌「新しい人」を創刊、編集長に。64年、日本リズム写真集団京都支部結成に参加。67年、京都児童文学会を結成、代表に、「赤トンボ」「やんちゃ」誌を創刊。69年、京都文化遺産を守る会を結成、事務局をひきうけた。

それらの団体の活動が京都民報に報じられたのはいうまでもない。幅広い人脈はここで蓄積され、執筆陣も広がっていった。当時、私はまだ公務員在職中で対外的な活動が制約されている中でそれは貴重な民報の財産となった。

松村氏はその後も「京の老舗をたずねて」の長期連載、「京の名工」取材などを通じて伝統産業界の人々とも親しくなり、また山村美紗、和久峻三ら著名作家と付き合い、連載小説を載せることに成功した。

残念ながら2005年、78歳で亡くなったが晩年は民報社取締役会長、

京都文学館の設立を求める会の事務局長、21伏見・夢と幸せをはこぶ会などで活動していた。

無罪判決で復職、即退職

さて1974年4月、京都地裁で私たちの弾圧事件の全員無罪判決が出た。私は社会保険事務所に復職した。14年間もかかった裁判は「京都で一番長い」と新聞でも批判されていた。私も、すでに民報で9年間も働き編集長を勤めていたので「社会保険給付専門官」に昇格の辞令をもったが、一度も出勤することなく退職した。そして晴れて公然と民報編集長の名刺をえるようになった。

その選択に迷いはなかったが、ずっと裁判闘争を支援してくれていた職場の仲間には申し訳ない気持ちでいっぱいだった。民報で懸命に働くことで少しでも報いたい、と思った。

休職中に毎月国から支給されていた6割の給与がなくなることでも妻にも迷惑をかけた。民報社の給料は公務員よりも低く、休職給と合わせてわが家の家計は成り立っていた。それだけ考えると復職した方が良かった。しかし、子どものところから新聞記者志望だった私にとっては民報の編集を続ける方が公務員よりはるかに魅力的だった。

もし弾圧事件が起きていなかったら、ずっと公務員のままで定年までいたかもしれない。そう考えると、

警察に弾圧されたお陰で長年の夢が実現したともいえる。人生って面白いと思う。

森ビル4階に移転

社員が増えるにつれ室町通り樫木町の社屋（共産党第二事務所と共用）では狭くなってきた。75年3月、上京区新町丸太町上がるに新築された「森ビル」4階に移った。明るく、広々としたオフィスに現像室、宿直・仮眠室を設置、応接セツトや受け付けカウンターを置くなど驚くほど立派な「社屋」になった。共産党府委員会事務所のすぐ近く、機関紙協会ビルの南隣で何かと便利だった。開かれた事務所にはいろんな人たちが訪ねてこられた。催しの案内や広告の依頼、原稿の持ち込みなど、多くは私と松村氏が応対した。

「京都民報社移転祝賀会」の写真がある。同年5月に事務所の披露をかねて行われた。最前列には（左から）柴田茲行、松村茂、山本満雄、安井真造、小林義治、細川三西、永良巳十次、北風一字氏ら出資者、二列目左端は私、藤原隆税理士、吉田関西



共同印刷専務、井上武夫共産党府顧問ら、さらには佐藤昭夫、大江洸氏らと社員が並んでいる。38年前とあってみんな若々しい。すでに亡くなった人も多いが、こういう人たちが民報を支えてくれていた。

大山崎町に引っ越し、配達も

わが家は72年に長女が生まれ、5

人家族となった。10年住んだ亀岡の市営住宅から乙訓郡大山崎町の府住宅供給公社円明寺ヶ丘団地に引っ越した。大阪の印刷所通いに便利だったのもこの団地を選んだ理由であった。分譲のため資金づくりは大変だったが、金融公庫・共済組合を通じての融資や父の援助もあって何とか納付期限に間に合った。

大山崎町に移ってしばらくして団地の共産党支部から赤旗日曜版と京都民報の配達を頼まれ、狭い地域での配達を引き受けた。毎週金曜か土曜、四十数軒に日曜版と民報を届けた。

京都民報は赤旗日曜版と一緒に配ってもらっている。職場でも地域でも読者の希望により確実に配達される体制がつけられていた。

居住地で、自分たちが作った新聞を直接読者に配るので、減ったり増えたりするのが分かる。どんな読者なのか、どの記事に興味があるのだろうか、考えながら配る。たまに顔を合わせることもある。減ったときはつい原因を考えてしまう。

これは編集企画をたてる上で大いに役立った。毎週水曜日、刷り上がったばかりの民報を持って帰り、翌日の編集会議に提案する企画案（次号と次次号）を練っているとき地域の読者の顔が浮かぶのである。

（以下次号）

『立命館 大学紛争の五ヵ月 1969』と 写真家——小原輝三さん

こはらてるぞう

黒川美富子（文理閣代表）

永遠の友 小原さん
あなたと同じ青春をすごしました。

三冊目の写真集もようやく終盤だというのに、あなたは力尽きました。

ほんとうに悔しいです。

あなたのシャッターの音を一枚一枚に刻んで、歴史の証言としての「立命館大学紛争」の写真集を仕上げ墓前に捧げます（後略）。

*

この弔電を打ったのは、三月二日の通夜の日だった。

色校正が出る日に計報が……

去年の秋も暮れ近く、「そろそろ、大学紛争の写真集にかかりたいねん。鈴木元さんに文章をお願いして、有田知行さんに編集責任者になってもらうけど、引き受けてくれる？」と電話があった。ガンの進行を十分知っての依頼だった。

年末、小原さんと関係者で編集会議をし、新年早々には有田さんから版下プリントも届いて、大急ぎで作業をすすめたが、写真集はレイアウトやキャプションなど手間がかかる。ようやく最初の色校正が出るという二月二十八日、計報が届いてしまった。私たちが、小原さんにできたことは、カバーデザインと写真の初校の折本を抱いて、旅だっただけのことまでだった。

二〇日に事務所で写真製版直前の編集会議をしていると、小原さんが和子夫人に、後から押し上げてもらうようにして三階まで上がってきた。スタジオにビリでたどりついたフラフラのマラソランナーが崩れるように、椅子へ……。しかし、編集会議の内容には確認するように耳を傾けていた。しかも、帰りには「今から、パソコンを見にいこうかな」と、いつもの悪戯っぽい笑顔になっていた。その言葉に、驚異的ともいうべき、めげない闘病姿勢をかいま見る思いだった。夫人とともに、い

や夫人に支えられて「細く、長く、しぶとく生きる」の合言葉での闘病がブログに書かれている。

全学集会での末川総長の写真も

四月二〇日、ようやく和子夫人の手元に『立命館 大学紛争の五ヵ月 1969』の完成本を届けることができた。

印刷の日、写真家の有田さんと東山幸弘さんが立ち会いくださった。印刷所への並木に、遅い八重咲きの桜が手鞠のような花房を揺らせていた。写真集は製版技術はもちろん、最後の印刷で出来ばえが決まる。二人が、細かな要望を出して、何度も刷本を確認した。そこには、「桜、今年も見られるかな」と言っていた、小原さんもうるはずだったのに。

刷本一台目には、一九六九年一月二〇日の「全学集会」で演題に立つた末川博立命館総長の一枚もある。

「わが立命館大学では、二万有余の



学生諸君のうちの数百人の寮生諸君との話し合が封鎖された会場でなされねばならない理由は、どこにもない」。末川総長の言葉に、以後、半年余り続く大学紛争の何であるかが象徴されていた。

四年前の光景を鮮明に

写真集発行への小原さんの思いは、「あとがき」にくわしいが、「学園封鎖が一日も早く解除され、正常な授業が再開されることを願いながらカメラで記録し続けた」と記している。

小原さんは、撮影した四〇本に余るネガを除湿器に入れて、長年大切に保存していた。いつか、出版したい思いで。そのフィルムから選びつくした三二枚のカットには、四年前に私たちが体験した、キャンパスのその日その日が焼き付けられていた。今、私が思い出そうとしても、まるでおぼろでしかないが、写真は鮮明にその光景を捉えている。

写真は封鎖された日の中川会館に始まり、わだつみ像の破壊で止まっている。

小原さんは、この撮影をとおして、常に全共闘にマークされていた。ついに、わだつみ像破壊の翌日に、拉致監禁されて、凄惨なリンチを受け、左腎臓破裂で一月半も入院する瀕死の重傷を負わされたからである。

この写真集は、正に小原さんが勇気を奮って撮影した一枚一枚である。キャプションを書くために、プリントをみていた鈴木元さんが、「これは、存心館封鎖解除のときだけで、よく見るとベニア板一枚で…」、ヘルメットも被らず立ち向かう学生たちの表情…。

小原さんは一部で、私は二部（夜間）生だったが、学生時代からの友人であった。しかし、リンチ事件の詳細を一度も聞くことはなかった。そういうことをあまり語らない人であった。この度、何度か「あとがき」をやりとりする中で、一度だけ踏み込んで書いてきたが、結局は、その部分は鈴木さんの原稿に託する方を選んだ。

貴重なフィルムを大事に保存してくれていたことを、学友として、一出版人として、ただ感謝している。私たちは、あの大学紛争の渦中にいた。しかし、四四年後に、その写真集を出すことも、手掛けることも、互いに想像もしない青春だった。

歴史学徒の眼差しそのもの

この本で、小原さんの写真集は三

冊目となる。

一冊目は、一九八七年の写真集『お日さまのまばたき―僕の子どもの保育園―』である。長男の入園から三人目の長女の卒園までの二年間、さまざまな園の行事や日常を撮影した。写真のこちら側に、カメラを向ける子育て真っ盛りの小原さんがいる。

子どもたちののはしやぎ声が聞こえ、送迎シーンには赤ちゃんを背負ったパパの姿もある。団塊の世代の、夫婦しての子育ての姿にもカメラは及んでいる。二冊目は、立命館大学を退職して



破壊された、わだつみ像を運ぶ学生（1969年5月20日）

留学を引率する機会が始まった、小原さんの中国熱はその後も続き、一冊に収まらないほどの枚数だったはずである。

「向銭看」とは、拝金主義という意味で、そこには、慕進する改革開放政策下、豊かさの一方にある、農村の出稼ぎや貧困、小皇帝とも呼ばれた象徴的な一人っ子、路地や街頭の風景まで、高度経済成長の表裏が記録されている。偶然居合わせた天安門事件の時、アスファルトにくっつき残る戦車のキャタピラの痕跡も、目敏く捉えている。

本書には、恩師の岩井忠熊先生が序文を寄せてくださった。「この写真集を見ると、今でも心があつくなる。文章の表現しえない歴史の姿がそこには生きているからだ」と書かれている。

小原さんは、ゼミでは出来ない弟子だったと「あとがき」に書いているが、三冊の写真集に収録された一枚一枚は、まぎれもなく歴史学徒の眼差しだと思う。どのカットも、時代の情報性に満ちたものばかり。

そんな意味で、この原稿のタイトルに「写真家―小原輝三さん」と書いた。今ごろ、きっと、あのはにかみを浮かべているにちがいない。彼は「含羞の人」でもあった。

から出した、中国を撮った『向銭看（シャンチェンカン）―中国1988〜1997年 豊かになれる人から豊かに―』である。学生たちの短期

*同書はA5判134頁・定価本体1800円（文理閣075・351・7553）

栗田 栄さんと



「悪魔の飽食」合唱運動

京都「悪魔」合唱団 馬原 郁

永年、日中友好協会（以後日中と略する）の専従として京都の日中友好運動を支え、全国的にも大きな役割を果たしていた栗田栄さんが2月28日に65歳の若さで胃ガンのため亡くなりました。33年間京都で暮らし、平和運動をしてきた人ですから京都に知己は多いのですが、私との関わりは池辺晋一郎指揮「悪魔の飽食」合唱運動が始まってからです。

困難を乗り越え大成功

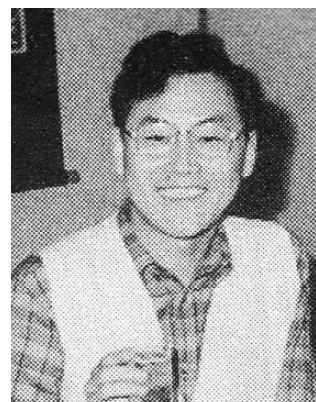
1994年は京都の行政が「遷都1200年」と騒いで諸行事を行なっていたので、井上吉郎氏の提案で民間でも……と映画作りの運動などもしました。その流れの中から文化運動に関わる人々が何人か集められ東京の全国縦断コンサート事務局長持永伯子氏から「悪魔の飽食」コンサート」の話が持ちこまれました。そこでの話し合いの苦悩と決断は96年1月6日の「日中友好新聞」に私

の拙文で紹介されました。根底には「京都ではやれないと言えるのか」という気持ちがありました。そして96年7月7日、盧溝橋事件の日に開催することを決定しました。

当時の中国は文革で日本でも中国に従う人たちが民主書店と言われる書店を襲撃したり某大学には「造反有理」「鉄砲から政権が生まれる」と大きな看板が立ったりしました。その中国に詫びる曲の演奏には反感がありました。また731部隊について森村誠一氏と共に取材して初版本『悪魔の飽食』では森村氏と共著となっていた中里正樹氏が共産党を除名処分されていたのでそれにこだわる人もいたし、当時の中国との友好的な交流はありませんでした。コンサートは企画として行なった中国旅行では、京都日中の旗は鞆の中に入れたままでした。

歴史はまことに紆余曲折するものです。何かの世界会議が日本で持た

れた時、日本共産党の不破哲三氏がレセプションで中国代表に接近し関係改善がなされ、それまでの仲たがいは氷解しました。合唱団が第1次中国公演を250人の参加でハルビン、瀋陽で行なった時は朝日新聞0記者、毎日新聞日記者とあわせて赤旗の下司記者も同行しました。



さて、様々な困難に直面しました

が中心である栗田さんは見た目にはアツケラカンとしていました。事務所を一部屋借りて、パートさんを二人頼み、事務所のビルに大きな看板を掲げました。日中ではカンパ活動にも取り組み、日中や合唱団へのお誘いも活発で「栗田さんに勧められて……」と日中や合唱に関わった人はたくさんいます。コンサートの準備はお金がいります。私どもが少しぐらい負担してもたまりません。そこで栗田さんのお母ちゃんがどっさり札束を持ってきました。コンサートは大成功でした。全国の合唱団員も客席も一杯。真新しいコンサートホ

ールが開館以来の最高の入りだと言われました。

今年はロシアで公演

全国縦断はこれまで国内23都道府県を廻りました。海外の北京・南京、アウシュビッツのあるクラクフ市、韓国のソウル、清州、そして西大門刑務所、ノグンリ事件現場では第3章を演奏しました。韓国で1週間にあたり行われた日韓併合条約百周年記念集会にも招待され、韓国国家からノグンリ平和賞も貰い盛大な受賞式には代表が出席しました。

今年7月にはモスクワとベテルブルグが決まっています。全国から265人が参加、京都からは14人が行き、国内では9月に長崎公演が予定されています。

池辺さんはロシア公演にあたって団員へのメッセージで、「過去を凝視することは実は未来を見つめることだ。その強い気持ちをも今度も携えたいと僕は思っている。全国の皆さんの歌声と共に本当の平和へ、地球の本当の未来へロシアの多くの人々へ大切なメッセージを伝えよう。」と記しています。それもこれも栗田栄さんが引いてくれたレールの上です。

全国の参加者全てが栗田さんを背負ってこの遠征を成功させたいと願っています。

2002年12月5日、真宗大谷派福井教区教学研究所の「公開講座」で栗田栄さんが「わたしの平和運動史」と題して講演しました。栗田さんが専従事務局長をしていた、ゆきのした文化協会の「ゆきのした」394号に掲載された講演要旨の一部を掲載します。（編集部）

高校時代に出会った先生

私は、1947年に丸岡町（福井県）竹田で生まれ、自然豊かな環境のなかで育ちました。

丸岡高校では、生涯の生き方を決める先生との出会いがありました。中林隆信先生です。英語を担当されていたが、「人間いかに生きるか」を折にふれて話されました。中林先生は高校の図書館長もされておられ、良書がたくさん揃えられていました。「ゆきのした」中野鈴子詩集特別号もあり、読みました。「ゆきのした」は中野鈴子が

1951年に創刊した）

高校3年の正月に、中林先生のお誘いで「ゆきのした文化協会」の新年会に参加しました。会場が加藤忠夫会長宅でした。そこで初めて加藤さんにお会いし、そのご縁があったから、現在、加藤さんのお傍で平和文化活動に参加させていただけのきっかけとなりました。その

わたしの平和運動史

京都での33年を振り返る

栗田 栄さんの講演から

席で、「ゆきのした」購読と会員になり今日に至っています。

同志社大学で学んだこと

1966年4月から1970年3月まで、同志社大学で学びました。「哲学・資本論研究サークル水曜会」に入部し、4年を過ごしました。神学部を含む全学部に属するメンバー100人が「思想信条をこえて、真理を学ぶ」気風、「一人はみんなのために、万人は一人のために」の精神でそれぞれ個性を尊重しあう環境で「人間愛・平和」の大切さ

を身につけられたように思います。その頃ベトナム戦争の最中でした。サークルで討論し、全員一致で「ベトナム戦争反対の決議」をし、デモに参加しました。水曜会の顧問でもあった住谷悦治先生（当時同志社総長）のご自宅を何度かお訪ねし、学究の姿勢―学問とは何かを学びました。大学のサークルで学び合った仲間の多くは、今も平和運動で活躍しています。

日中友好協会の専従になつて

大学を卒業してから2ヶ月間、民間会社勤めした後、日中友好協会京都府連の専従職員にならないかとのお誘いがあり、1970年6月から就職しました。世間の常識からすれば、給料面では低く大変でしたが、この分野で平和友好活動に青春をかけようと思っていました。やりがいがあり、協会には善意の心やさしい多くの方々とのお会いがあり、皆さんに支えられて29年間勤めることができました。

（このあと大西良慶師、福岡精道師、細井友晋師らの思い出、京都の戦

争展、中国残留孤児を支援する活動、「悪魔の飽食」の劇、合唱組曲公演など京都時代に体験した取り組みと出会いの一端を紹介）

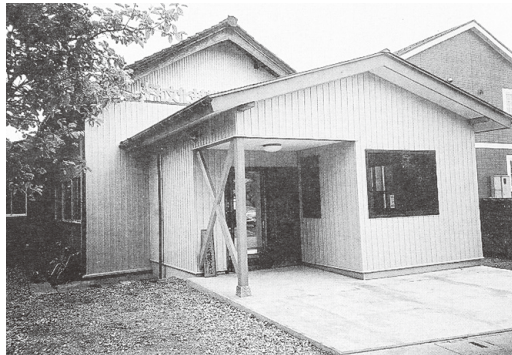
自宅を平和文化史料館に

偶然といえますが、33年間暮らした京都での生活を終え、郷里の福井に帰る準備をしていた1999年6月「ゆきのした」から送られてきた『館報』の「物置、倉庫などないかな」の小さな記事が目にとまりました。

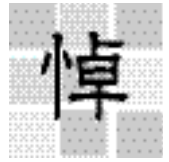
そのとき、文化協会は借家の館の移転を迫られ、諸資料の保管場所を探していたのです。丸岡の家では、戦後から細巾織物業をやっていたことが、不況などで20年前に閉鎖し、工場が空いていました。さっそく郷里の母に電話して伝えたと「お役にたつなら使っていたんだきなさい」との返事だったので、加藤会長に申し出ました。

母は、戦前、少女時代に軍需工場で働かされ厭な戦争体験をしていましたので、平和のためになるならの思いもあり、また息子が浦島太郎の心境で帰福する心境も察しての判断もあったのかと思います。

私はこれまでに、多くの方々から学んだことを、これからの平和文化・友好運動の中で活かしながら、皆様とご一緒にさらに「新たな出会い」を求めて生きていきたいと思っています。



自宅を「平和文化史料館ゆきのした」に



共産党府委初代書記長の

大原 進さんを偲ぶ

藤井舒之（米花時代の仲間）

今年の春分の日3月20日、「大原

進さんを偲ぶ会」が長岡京市立中央公民館で開かれ、120名の人々が参加しました。市田忠義日本共産党書記局長をはじめ、渡辺和俊京都府委員長、小池潔神奈川県委員長らと共に、寺前巖元衆議院議員、西山登紀子元参議院議員、畑野君枝元参議院議員ほか、岡本康治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟京都府本部会長らも参加、それぞれ偲ぶ言葉を述べ、最後に参加



者全員が遺影に献花しました。

堀川高校生時代に入党

大原さんは1936年12月に開業医の長男として生まれ、姉2人、妹1人の4人兄妹、父親は軍医として戦争に徴用されフィリピンのレイテ島で戦死でした。中学では新聞部、

「すっちゃん」と呼ばれた

米花製作所時代が原点

堀川高校に進んで剣道部に入りました。このころ、父を戦死させた戦争と天皇責任を学ぶ中で、17歳で日本共産党に入党、学園闘争などで活躍しました。その後、京都府立西京大学（今の府立大学）に進み、3回生の時に東北大学に編入、ここでも日本共産党東北大学支部の文学部松風寮班で活躍しました。

1960年、東北大を出て、京都市南区の米花製作所に入社。若い大原さんは、働く若者たちと共に力い

っぱい活躍します。まもなく労働組合を作って委員長になるのですが、職場の人たちからは「すっちゃん」「すっちゃん」と呼ばれ、たいへん人気のあるリーダーでした。

その後、組合つぶしを狙う元特高の労務屋が入ってきて、比叡山の山奥に連れて行かれ首を絞められる事件が起きました。命まで狙う激しい組合つぶしの攻撃にも毅然としてたたかい、地域の支援も得て、ストライキも決行してはねのけました。このたたかいは南区唐橋・吉祥院地域の職場、労組を大いに励まし、大原さんは新産別地連のブロック幹事、また日本共産党南西群委員会委

員になり、この地域の労働組合づくり、平和と民主主義の共闘会議の結成をすすめるなど、活動を大きく広げます。

その後米花を退職、日本共産党の専従として南地区委員会で常任委員、地区委員長を歴任。

1970年の歴史的な知事選挙の年には、同時にたたかわれた府会議員補欠選挙に乙訓から立候補、続いて長岡町長選、いっせいで地方選挙と1年間に3回も候補者となって選挙

戦をたたかいました。府会議員選挙では324票差で次点という当時としては大善戦でした。

77年からは京都府委員会の常任委員、1987年の第18回党大会で中央委員に選ばれ、京都府委員会の初代書記長となりました。

「だんこさん」の愛称も

大原さんは、目標を貫くために「断固として」をよく連発して、そのため「だんこちゃん」「だんこさん」と敬愛をこめて呼ばれていました。いっしょに仕事をした多くの人たちが、独特の厳しい目とともに周りの人たちにそそぐ優しい目、温かい心配りと気遣いがうれしかったと話しています。

92年には心臓を患って病氣療養に入りますが、93年には回復して日本共産党関西地方出張所の仕事に就き、94年に共産党神奈川県委員会の副委員長に。98年には参議院選挙を担当し、畑野君枝さんを当選させ神奈川県初の日本共産党参議院議席が実現しました。機関誌「前衛」98年9月号に大原さんの論文「悲願達成―神奈川初の参院議席」が掲載されています。

99年1月から中央委員会で仕事をするようになり、機関誌活動局長、機関誌活動局次長、党建設委員・機関紙活動局次長と中央委員会でこの分野の仕事を歴任しています。

新日本婦人の会 京都 50年のあゆみ

『新日本婦人の会 京都 50年のあゆみ』は、1962年11月に結成大会をもった同会の半世紀の歴史を綴った書物である。編集・執筆にあたった人がすべて同会の働き手であることに好感を持った。年史を編むとき、書きなれた人に依頼することが少なくない。そういう手法をとらなかったことから、同会が時代にとのように向き合ってきたかが、記述の精粗からよくわかる。

BOOK

同会の50年史だが、時代自身の50年の歴史にもなっている。もちろん記述外の出来事が多数を占めているのだが、同会がかかわった事柄が豊富なるがゆえに、会の外の動きがわかるようになっていく。さらに言えば、同会は全国組織の県段階の組織でもあるのだが、本書で全国の動きもわかる。

生れてからの15年ほどは、蛭川虎三府知事のもとだった。

「戦争によって夫や父を失った母子がまだたくさんいた51年に、蛭川府政が全国に先駆けて母子相談員制度……7つの母子寮と200戸の母子住宅……母子家庭への温かいまなざしと自立のための施策を進めた」と本書は書いているが、自治体

施策への働きかけと首長選挙へのかわりは同会の伝統でもあった。

学童保育所、児童館、夏季学童保育所をつくるために「児童館をつくろう」というスライドを作成した。会員だけでなく、広く人々、なかなく女性のねがいに寄り添って活動してきたのも同会の柱だった。1988年の25回大会で、念願であつた会員1万人を達成した同会



女性の願いに寄り添って活動

だがここまで26年。

1978年に全国組織が提起した「要求別小組」は、一つの要求でも会に加われるという画期的な方針だった。「料理」「パッチワーク」「子育て」「ジャズダンス」「傍聴」など数多くの小組が広がった。「憲法を守る」ことも同会の伝統だ。本書から、同会の実践と50年間大切にしてきたことを知ることができる。

（井上吉郎・WEBマガジン「福祉広場」編集長）

（新日本婦人の会京都府本部、頒価1000円）

しかし、どんなに忙しい時でも、少しの隙間を見つけ、京都に帰ったら孫と丹波自然運動公園に行ったり、水遊びをしたり、家族思いでした。また、大原さん自身が大学のラグビー好き。神戸製鋼ファンで、テレビで観戦したり花園や秩父宮ラグビー場へ夫人や同僚と一緒に応援にかけています。山歩きもとても好きでした。

退任後も乙訓地区委で

大原さんは、2006年1月、第24回党大会で中央委員を退任、乙訓に帰って、自ら望んで乙訓地区委員会の職場援助委員を担当しました。

京都に帰ってきた大原さんを中心に、60年代のはじめに米花製作所と南西地域の職場でたまたか仲間たちも集まりを持ち、年1回は開かれました。2009年には大原さんが「米花製作所でのたまたかを綴った記録集をつくらう」と呼びかけ、「夢と希望を持ち不屈にたたかった若者たち」1960年代はじめの米花製作所でのたまたかというA5判56ページの小冊子が誕生しました。

大原さんは、この小冊子の中で、「わずか3年の間のことでしたが、私の生涯を通じて宝ともいえる得がたい経験でした。働く若者との交流は学生生活を終えたばかりの私に、働くものの連帯の大切さを教え、たた

かう勇気を与えてくれました」と書いています。大原さんから学び、大原さんと一緒にたたかった仲間たちもまた、この時の経験を原点として、その後も、今も、引き続いて頑張っています。

2012年9月1日、病院で治療中の心臓病が急変して、帰らぬ人となりました。75歳の生涯でした。

今年の春分の日の「偲ぶ会」では、多くの方から寄せられた一文を綴った「大原進さんを偲ぶ」という小冊子が配られました。突然の訃報に驚いた人々も、大原さんの遺志を引き継いで、新しい道を拓いていくという思いいっぱい冊子になっています。

今年の合葬者、京都から58人

第66回解放運動無名戦士合葬追悼会は3月18日、東京・日本青年館で行われ、京都から58人が推薦され合葬されました。次の方が含まれています。

（50音順、主な経歴、享年）

- 浅郷伸一（京都ミューズ代表） 72
- 井ノ口誠二（京都市議3期） 80
- 今井康雄（年金者組合府委員長） 72
- 大原 進（共産党府委員会書記長） 75
- 河本 清（簡保でレッドパージ） 86
- 木嶋浩二（国労西日本委員長） 72
- 佐藤良輔（京教組委員長） 89
- 立原昌保（市立高教組委員長） 83
- 西垣昭子（新婦人府本部副会長） 85
- 平田秋子（洛北内職友の会会長） 88
- 森川 隆（共産党洛南地区委員長） 83
- 山田二郎（京都府職労保険支部） 80

朝鮮戦争前後の京都の学生運動

西 一
不審商科大学教授一 現代の危機と
五〇年代学生運動

安倍内閣の七〇%を超える支持率は、政治学でいう「保守革命」「新保守主義」のひとつの到達点といえることができる。「新保守主義」とは、森政稔氏が定義しているように、福祉国家的な改革に対抗して、政治・文化的には、保守主義をとりながら、経済的には新自由主義を徹底的に進める政策である（『変貌する民主主義』ちくま新書）。改憲路線を強引に押し進め、アジアに新しい「冷戦」の危機を創りながら、TPPに参加して、「アベノミクス」といったインフレ政策を推進しようとしている安倍内閣こそ「保守革命」の極北である。

学でも、人事権や授業の編成権を学長に一元化し、学科を廃止しようとする改革案が出されてきている。それを推進している大学の執行部は、それこそが新自由主義的な大学改革（改悪）であるということさえ、よくわかっていないという「痴呆」状況である。

このような状況のなかで、どのような対抗文化（運動）をつくらばいいのか、という問題を考えるために、私はここ数年、明治期から戦後史に研究テーマを変え、特に一九五〇年前後の民衆運動や学生運動を研究している。まず早稲田大学の吉田嘉清氏から始めて、京都関係では、小畑哲雄（小樽商科大学『人文研究』一二〇号）・中岡哲郎（『アリーナ』一一号）・上田篤（同『人文研究』一二二号）・坂東慧（『商学討究』六三巻二・三号）氏らの聞き取りを掲載している。これらの聞き取りは、インターネットの使える人は、小樽商科大学の図書館のホームページに入って、Bareilという所から私の名前前で引いていただければ、すぐに読

めるようになっていく。使えない方は、私の所（〒601-1321 京都市伏見区醍醐北端山五二二）に、ハガキを送っていただければ、すぐにお送りする。

ここ数年、五〇年代の学生運動を総括する動きが各地で活発になり、東北大学や北海道大学の反イールズ闘争の記録が公刊され、東大や早稲田では以前から学生運動史が出されてきたが、何とも関西の動きが鈍いというのが実感であった。それもあって聞き取りを始めたのだが、京都については、以前から中岡哲郎氏の『現代における思想と行動』（三一新書）や豊田善次氏の『高橋和巳の回想』（構想社）などの著書、大島渚氏の回想、本誌の小畑哲雄氏らの記事など、優れた記録があった。その上、近年になって田中貞夫・太田雅夫編著の『五〇年代の群像 同志社の青春』（刊行会）が出版され、同志社出身の徳山詳直氏の『芸術立国』（幻冬舎）や京大出身の坂東慧氏の『昭和とは何であったか』（日本評論社）などの回想記が次々と公刊されている。

そして、昨年から『大原社会問題研究所雑誌』（六五二、六五三号）が、五〇年前後の学生運動の特集を組み、六五三号には京大出身の小畑哲雄・望田幸男氏の記事が載せられている。六〇年前というのは一つの節目で、記録を残そうという動きが個人の人かでも出てきている。

二 新しい資料の発掘に

現在の私は、一〇〇人以上の人から聞き取りを進めるとともに、文献資料の発掘に努めている。京都大学の大学文書館の資料や京都府立総合資料館の文書以外に、いろんな資料が存在する。ひとつは為政者の側の資料で、GHQの文書は、一部は公刊されているが、『日本占領・外交関係資料集』（柏書房）、膨大なマイクロ・フィルムが、立命館大学に所蔵されている。何よりアメリカのナショナル・アーカイブの調査が必要で、今夏は一カ月ほど、ワシントン暮らしをするつもりである。

宮内庁書陵部や国立公文書館の資料調査は終えたが、ここでも京大天皇事件などで面白い文書がでてきている。機会があれば、本誌でも紹介したい。また法務府特別審査局（いわゆる「特審局」）の文書である。これは以前から『特審月報』が不二出版から公刊されているが、特審局に

会員消息



岩井忠熊氏の新居で世話人会開く

本会代表の岩井忠熊氏は1月末に大津市雄琴の「アクティバ琵琶」に入居された。琵琶湖に面した素晴らしい環境、300室以上があり、岩井氏はレジデンス棟（住居棟）の広い部屋に自宅から書籍運びこんで研究・執筆を続けておられる。

「大津市民になったが社会的活動は従来のまま京都を中心に行います」とのこと。

4月19日には世話人会一同がお部屋を訪問した後、施設の立派な会議室で会議を行いました。

70年代西陣の医療運動

西沢いづみさんが論考

立命館大学先端総合学術研究科博士課程の西沢いづみさん（西京区）はこのほど刊行された「生存学研究センター報告19」に論考「1970年代の京都西陣における老人医療対策と住民の医療運動との関わり」を発表した。先に書かれた60年代までの西陣での地域医療と住民組織の役割についての論文の続きとも言うべき内容。同大学生存学研究センター発行となっている。

杉井六郎氏の追悼記念号

「キリスト教社会問題研究」

「キリスト教社会問題研究」（同志社大人文科学研究所編集・発行）61号は杉井六郎名誉教授追悼記念号。会員の高久嶺之介、井ヶ田良治、小田切明徳らをはじめ18氏、が昨年10月8日に88歳で亡くなった杉井先生の業績や思い出を記している。

入会

笹原総生（伏見区）、大前峯雄（大阪府四条畷市）
退会
川上博司（山科区）

お便りから



安斎氏と福島汚染地域へ

私の近況。モンゴル政府のアマラ衛生省副大臣の来日（3月4日から11日）にあたって、その行程を企画調整同行し、モンゴルの新たな発展への足がかりを作りました。

また安斎育郎先生と3月下旬三日間、福島県の放射線汚染地域を回ってきて怒りを新たにしました。元気なうちは毎年調査に入り継続的にレポートを発表し続ける決意を固めました。（西京区・鈴木元）

自らの半生も振り返る

知らなかった記事・人物も登場し大変勉強になり自らの半生も振り返

ります。湯浅俊彦様に勧められました。今後ともよろしく願います。

（大山崎町・山口允己）

『フランソワ喫茶室』

ご苦勞様です。先日、フランソワに寄りましたところ、立野隼夫氏より『フランソワ喫茶室』（北斗書房、佐藤祐一著）という貴重なご本もいただきました。お母様の志子様は大変な苦勞をして、夫（元共産党員）や谷善らを支えてくれました。

（左京区・西山とき子）

懐かしかった写真

205号ありがとうございました。11頁の写真は、私が「憲法を暮らしのなかに」蜷川虎三講演集で、府庁の広報部から借りて使ったものと同じで、懐かしく思い出しました。編集者として初めて企画、編集して出した、忘れたくない本で田中米一研修所長の指導を

頂きました。（下京区・黒川美富子）

蜷川さんの記事は貴重

近時、あまり評価されていない蜷川さんの欄、嬉しく拝読しました。もう、あのような、蜷川府政が再構築される事はないと、思えるだけに、貴重な記事だったと思います。蜷川さんの演説は、ほんとうに、上手でしたね。除名された、野坂参三氏の演説上手と共に、忘れられません。（四条畷市・大前峯雄）

「事務局よりのお願い」

『療原』DVD第4巻（151・200号）に欠頁が見つかりました。すべてのDVDに不具合が生じている訳ではありませんが、ご購入頂いたDVDに不具合が見つかった場合は、交換いたしますのでご連絡下さい。

関連する文書が、かなり公刊されてきている。特に破防法の制定に係わった特審局の関之氏の文書が、近代日本史料研究会によって目録が作られ、国会図書館の憲政資料室に保管されながら、現在でも未公開になっているのは残念である。

運動の側の資料として興味深かったのは、日本共産党の関西地方委員会の資料が、大阪の岩井会に保存されていたことである。志田重男氏の遺稿集を編纂された渡辺照子氏がご健在で、今でも資料を守っておられる。

おそらく個人の文書ということになれば膨大であり、私も京大天皇事件で中岡氏に公開質問状を書くように頼んだ、京大共産党の指導者榎並公雄氏の文書をご遺族から預かっている。昨年から引越越しと目の手術に紛れて、未だに整理していない。この会に参加しておられる方でも、日記や手紙、書類などを捨てようと考えておられる方は、是非、ご一報いただきたい（電話090-1164315436）。どんな文書が、資料として重要になってくるのかは、私も論文を書くまでわからない時がある。今こそ五〇年代の京都の民衆運動の記録を残し、総括していける最後の時である。この場を借りてお願いしたいと思って筆を執った。よろしく願います。

京都の民主運動史を語る会 総会と懇親会のお知らせ

とき 6月15日 (土)

午後2時

ところ 京都市職員会館かもがわ

(中京区河原町竹屋町東入る、石長旅館の奥)



■記念講演■

「憲法の危機と京都の改憲阻止運動史」

7月の参議院選挙の最大の争点に改憲問題が急浮上しています。憲法の危機にどう立ち向かい、展望を切り開くか、京都での改憲阻止運動の歩みにもふれて語っていただく。

講師

井ヶ田良治・同志社大学名誉教授



1926年仙台市生まれ。京都大学文学部卒、51年から96年まで同志社法学部で日本法制史を教える。京都憲法会議など長年改憲阻止運動に参加してきた。本会会員。長岡京市在住。著書に『近世村落の身分構造』(図書刊行会)、『法を見るクリオの目』(法律文化社)、『日本法制史を拓く』(部落問題研究所)など。

記録映画「日本の憲法」上映

井ヶ田氏の48年前の姿も見られます (写真)。

*会員外のみなさんの参加歓迎 (資料代500円が必要です)。

なお、午後5時から同じ会場で懇親会を開きます。会費30000円。同封の葉書でお申し込みください。

総会で上映される 48 年前の記録映画

「日本の憲法」

蜷川・末川・住谷氏らが登場

記録映画「日本の憲法」は1965年に、京都改憲阻止映画制作普及委員会により制作され全国で上映された作品。労働者・主婦・青年学生などの学習会をオムニバス風に扱い、憲法制定の過程と日本国憲法の特徴、改憲論の問題点、安保体制と憲法などを資料映像を駆使しながら描いています。6年前にDVD化、かもがわ出版から発売され反響をよびましたが、いまた改憲の動きが強まっているなか、各地で再上映されています。

映画の中で、末川博・住谷悦治・田畑忍ら学者、大西良慶清水寺貫主・蜷川虎三知事ら京都の顔に、太田薫総評議長も加わり、それぞれが情熱を込めて改憲阻止を説いています。憲法学者の小林武氏は「明文改憲に向かう動きが急な今こそ、60年代の改憲阻止運動の原点を知ることが不可欠」と語っています。

総会では開会冒頭に上映します。(30分間)

催し案内

毒ぶどう酒事件描く「約束」上映 名張

毒ぶどう酒事件死刑囚・奥西勝さんの、無実を叫びつづけている独房の半世紀を映画化した「約束」が5月18日から京都シネマ(烏丸四条下ル西側)でロードショー上映される。仲代達矢、樹木希林さんらが出演、国民救済会の活動も紹介されている。一般1800円、シニア1000円。

映画「ひろしま」上映と講演 5月24日(金)ウイングス京都で。14時、18時の2回開会。1955年ベルリン国際映画祭受賞、関川秀雄監督作品(モノクロ、104分)。月丘夢路、岡田英次、山田五十鈴ら出演。講演は花垣ルミさん。京都・映画人9条の会主催。協力券10000円(当日12000円)

編集後記



▼連休突入までに作業を終えたいと思っていたが、約束の原稿が入って来ず、今号も苦労した。16頁の誌面は引きつづき維持していきたいの、いっそうのご協力を。

▼もともと穴埋め原稿としてスタートした「京都民報」私史」なので、紙面の都合で休載したり、1頁にしたりしている。書くことはいくらでもあるのだが、「私史」として、私しか書けないことに重点を置くことにした。いつの間にか76歳。でもまだまだやっておきたいこと、書き残しておきたいことが多く、少々あせってきている。(湯浅俊彦)

